

# 信心と行業

藤原幸章

「たゞ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべし」とは、われわれの信心のすべてである。われわれが宗祖から聞くことも、また宗祖が法然から、法然が善導から聞くことも、ただこのこと一つにつぎる。さらに善導・道綽・曇鸞……等、すべてが念佛一つにつながり、三國の祖師おのおのこの一宗を興行せられるほかはない。こゝではたゞ念佛一つがまことであつて、かくして「念佛成佛是真宗」が成立する。

ところで、ただ念佛一つがまこととけとられるためには、必ず信心を要とする。念佛は念佛であつても、それが單なる口稱にとどまるならば、それは所詮散善淺行の一分にすぎないことは、『觀經』の顯說においても明らかである。それゆえに「念佛行者必可具足三心」といわれるし、老少善悪の人をえらばぬ彌陀の

本願も、ただ一つ「信心を要とす」るのである。

しからば信心とはどのような構造をもち、それはわれわれの行に對してどのようなにはたらくものであろうか。信心はただ念佛としてはたらくのみで、その他に對しては無關係なのであろうか。ここでは念佛のほかの諸善は單に疎外せられ否定せられるだけにとどまるのであろうか。善導は現に「三心既具無行不成」とまでいっている。この言葉は少くともその當面においては、ひろく世間・出世間のすべての行業にかかるとみられるのであつて、單に念佛だけにとどまるものではないと考えられる。としたならば、信心と行業との關係はこれをいかに解するべきであらうか。いまこのことを明らかにするために、特に善導の實踐論を手がかりとして出發したいとおもう。

## 一

善導が稱名念佛の一行をもつて彼の佛の願に順ずるがゆえに、これを「正定之業」とし、眞實の行として強く宣揚していることは、後の法然の『選擇集』をまつまでもなく、その著作の全體を支える基調である。たとえば『定善義』眞身觀釋下三緣釋の終りには、念佛と諸善とを比論して「自餘衆行雖名是善、若比念佛者、全非比較也」といい、『大經』の四十八願はもとより、『阿彌陀經』の諸佛證誠も、専ら念佛往生を説きあかすための經説であつて、特に『觀經』のごとき諸善がいかにか複雑にとかれていようと、「此經定散文中、唯標專念名號得生」するにあるとまで揚言している。それゆえに下の深心釋就行立信のなかには、雜行に對して五種の正行を規定しているけれども、そのうち稱名念佛の一行をもつてひとり正定之業と定め、また、終りの流通分にいたつてはいわゆる廢立釋義を提出して「一向專稱彌陀佛名」することこそ、佛願の正意・佛説の眞髓であるとむすんでいる。善導によれば、念佛こそ正しく彼の佛の本願に順ずる行であるからであつて、師がかくのごとく、稱名一行を顯揚することは『觀經疏』並びに

『具疏』の全體を一貫する明説である。

ところで、もし善導の主張がたゞこれだけにとゞまるならば、その行業論は『選擇集』の相承のごとく極めて簡明であるといえる。要するにそれは「廢立爲正」ということ一つで截然とわりきれぬからである。けれども、事實は必ずしもしかく簡單ではない。なんとならば、善導にはまた一面においてわれわれの三業の行をも眞實の行とするかのごとき主張が、隨所に認められるからである。たとえば、あれほど明快に念佛一行を際立てた上述の三緣釋においてすら、親緣の釋下には「念佛衆生攝取不捨」の經文を解釋するにあつて、「衆生起行口常稱佛佛即聞之。身常禮敬佛佛即見之。心常念念佛即知之。衆生憶念佛者佛亦憶念衆生。彼此三業不相捨離。故名親緣也」等と、明らかに衆生三業の行が積極的にとりあげられている（『法事讚』上・同意）。もともと「念佛衆生攝取不捨」とは、常没の衆生のためにする如來の一方的・積極的な大悲を、もつとも端的に顯示した經文である。したがつてそれは、本來われわれ人間の内在的な三業起行の全面的な否定を意味するものといわなければならない。しかるに、この經文を解釋した疏文には、逆に衆生三業の起行があだかも必須の條件であ

るかのごとくに説かれている。また、さらに注意すべきは、これまた上に一言した五正行の論である。五正行とは善導みずから「依<sub>レ</sub>往生<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>・行者、是名<sub>二</sub>正行<sub>一</sub>」と定義することく、『觀經』に説くもろもろの行業を要約したものであつて、そこではたとい助業の名は附せられていても、稱名念佛のほかの讀誦・觀察・禮拜……等、明らかに本願の行にあらざるもろもろの行業までが含まれている。にもかゝらず、それらがすべて正行として一つに統合せられ、特に雜行に對應せられているのである。のみならず、さらに『散善義』冒頭の「三心正因・九品正行」説においては、世間・出世間の諸善を直接の内容とする九品散善の行すらも、「九品正行」の名のもとにそれがすべて「正行」として扱われ、かくして三心釋の結びにいたれば、上述のごとく「三心既具無<sub>レ</sub>三行不成」といふ、しかも「此三心亦通<sub>二</sub>攝定善之義<sub>一</sub>」というのであるから、これにしたがうかぎり、善導においては三心の信心さえ具足するならば、念佛のほかの諸善もことごとく正行として承認せられているといえるであらう。

すでに安心の疏といわれる『觀經疏』一部においてすらかくのごとくであるとするならば、行儀の疏たる『具疏』四部においてはなおさらこの傾向は顯著であつて、

われわれはその適例をまさしく『禮讚』前序の安心・起行・作業論の上にみることができ。即ちここでは、五念の起行も四修の作業もそれが眞實の意味を附せられる所以のものは、ひとえに三心の安心にもとずき眞實の心に相應する行業であるからにほかならないとせられている。もとよりそれは正定業の稱名を中軸とするものであることは、つづく稱名一行三昧の説によつても明らかであるが、さらに下の專修四得・雜修十三失の判釋においては、いわゆる專修正行とは、正念に住して佛願・佛教・佛語に相應する行業であること、すなわち三心を具足した眞實信心の行業であること(『散善義』深心釋参照)が定められているに對して、逆に雜修雜行とは、本願を疑惑する三心不具足をもつてその本質とするものと批判せられている。されば善導における專修正行とは、五種正行の定義にかかわらず、それは正定業の稱名を中心として極めてひろい擴がりをもつものとみられるのであつて、客觀的には本願稱名の根本主張をおびやかすかのごとき印象をすら與えるものといわざるをえないものがある。かくして善導の實踐論は、一面において鋭く稱名正定業を際立てるとともに、また一面においては念佛以外の三業起行をも承認しつつ、五部九卷の全卷に展開せ

られてみるとみられるのである。しかししてこの場合兩者を結びつける結合點は、「三心」の名によつてあらわされる眞實の信心そのものに求められているのであつて、信心から發する行業であるかぎり、たといそれが本願の行でなからうとも、正定業たる念佛と矛盾したりあるいはそれを否定したりするものではなくて、却つてそれは念佛に隨伴し相應する眞實の行とせられているものと考えられるのである。

かくして善導の實踐論は、一見相互に矛盾するかのごとくみられる兩種の要素を内に含みつつ、しかもそれが三心の信心を契機として體系的に統合せられ、極めて實踐的に組織せられているものといふことが出来る。それゆえに善導をうけた法然につながる浄土諸派、就中、西山系の人々の間には早くから信心を契機とする諸善のよみがえりが強く唱えられてきたところであるし、またもつばら「廢立をもつて先とせられた」眞宗においても、宗祖の『和讃』(『正像末和讃』草稿本)や特に晩年の書簡には、この意味における諸善への關説がかなりの積極性をもつて懇説せられていること周知のごとくである。

## 二

ところで善導の實踐論はたしかに以上のごとき組織をもつと考えられるのであるが、それゆえにわれわれは岐路に迷わざるを得ないものがある。何故ならば、「三心既具無行不成」ということも、信心を契機とする積極的な三業起行ということも、理論としては一應承認せられうるとしても、われわれをつつむ現實の非合理性はこれと眞正面から衝突せざるを得ないからである。われわれがもしも信心を介して無行不成の世界に難なく轉ずることが出来るとしたならば、もはやわれわれは凡夫ではないことはもとより、そもそも浄土教そのものさえも興起する筈がなかつたであらう。われわれはむしろ宗祖のいわれるように、攝取の慈光の中にありながら常に貪愛瞋憎の雲霧に閉された煩惱具足の凡夫である。信心において成長するものでもなく、念佛して淨められるものでもない。それどころか、眞實の佛心に遭遇するそのときこそ、逆に自己の不實がもつとも深く自覺せられるときである、とは誰よりも善導自身が身をもつて領解していたはずである。

それゆえに、善導といえども眞實の信心さえ具足すれば、三業の行がそのままにして悉く眞實となるという切るほど樂天的であつたとはい決しておもわれぬ。むしろ

善導の人間論は徹底して自覺的であり、いわば悲觀的であつたとさえみられるのである。このことは特に信心そのものを解明した三心釋義において、善導自身徹底的に追求し解明し盡しているところであつて、その深刻を極めた人間分析の前には何人といえども謙虛に頭をたれるよりほかないであらう。

善導によれば、われわれは人間であるかぎりすべてが貪瞋邪偽奸詐百端であつて、悪性侵め難きことあだかも蛇蝎に同じい。従つてこのものなす三業の行爲は、いかに不斷の緊張をもつて急走急作すれどもことごとく雜毒の善・虚假の行というよりほかはない。もとより内外相應する眞實の行を行じうると、みずから許すべくもない。われわれはいつでも如來に對して現に「罪惡生死凡夫」であつて、「久遠劫よりいままで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだうまれざる安養の淨土はこひしから」ざる煩惱興盛の身である。總じていえば、如來の前には、われわれはその全存在をあげて「應に惡道に墮す」べき「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」であるといふほかはなく、ここでは曾つては一個の存在としてありえた自己も、如來の眞實に遭いえた一瞬にまつたく崩れさせつてもはやわれとして誇るべき何物も存在しえない。し

かもこのことは二河喻にも指適することく、いのちあるかぎりどどまることがなく、信心をえてもえなくてもまつたく同様である、というのである。

としたならば、信心はわれわれを淨化する契機でもないし、ましてこのとき煩惱が消滅して佛となれるのではない。信心が淳ければ淳いほどいよいよ明らかかなことは自己自身の煩惱熾盛の足下であり、われとなすことすべてが墮獄の種ならざるはないということである。まことに信心とは善導がいみじくも「信知」(禮讚三心釋)といいあらわしたごとく、明らかに知ることである。明らかに知るとはありのままに自己の不實を知り、同時にこのものために、起つた本願の大悲を信ずることである。即ちそれは本願のいわれを聞いて、正しく佛智に照らされてこそ知る自分自身の不實である。されば信心において曇りがなければ、いつでも自身は如來に對して現に罪惡生死の凡夫であり、それゆえに「たゞ念佛のみぞまゝと」領解せられるよりほかはないのである。

### 三

善導の領解が以上のごときものであるとしたならば、三心結釋において「三心既具無行不成」といい放つた行

も、後世の一部の人達が解釋したような三心の信心を契機とする諸善のよみがえりというごときものではなかつたこと明瞭である。それは所詮、善導が強く主唱した彼の佛の願に順ずる稱名一行を指すもの、というほかはなく、従つて「無行不成」の「行」とは、たといわれわれの汚れた口業にあらわれた念佛であらうとも、眞實信心の稱名であるかぎり、一聲一聲がこの佛の願に相應した彌陀回向の法として必ず正定の業となり、眞實の行とならざるはないとの意味に解するべきであらう。

にもかかわらず、善導の實踐論は單にこの一面にのみとどまるものでないことは、既に上においてみてきたごとくである。としたならば、稱名正定業のほかの三業起行論はこれをいかに解するべきであらうか。もとより善導において眞實なるものは本願相應の行のほかには考えられなかつたこと、従つて本願稱名のほかに正定之業はまつたくなかつたことは、いま改めていうまでもないところである。信心とは機の虚假を信じ法の眞實を信ずること、即ち煩惱具足のわれわれの正定の業因はただ念佛一行のほかにはなかつたこと、これまた上述において明らかである。しかもなおかつ一面において明瞭に三業起行がひろく語られている事實は、何を意味するものであ

らうか。

われわれは一見矛盾するかのときこのような事實においてこそ、善導自身の上に他力眞實の信心が生々とはたらきつつある具體相をありのままにみてとるものである。即ち善導におけるひろやかな三業起行論は、その稱名正定業論と矛盾したり、廢立爲正の根本主張をくつがえずごときものではなくて、却つてここにこそ本願眞實一つに歸した善導の信心が生きてはたらく具體相があつたのである。本願眞實に歸する、それゆえに稱名一行こそ本願に相應した唯一の正定業であることに相違はないけれども、しかもこのこと一つが決定せられた上には、この正定業たる「稱名念佛の本行」(『御文』)を中心とし、これに随伴つて、ひろく三業の上にもその徳の一分が流れ出るのは當然のことであらう。何となれば、むしろそこにこそ他力眞實の信心がわれわれの現實にはたらきでる具體的ながらあるからである。

もともと信心は一度びえてのちは靜止したままいささも動かないというごときものではなく、それは常にわれわれの主體となつて念々刻々われわれの現在にはたらし出るものでなければならぬ。それゆえに信心の世界においては、「一つことを聞きてもいつも珍らしく、初

めたるように信の上はあるべきなり」(『御一代聞書』)といわれ、同じことを幾度きいても「飽きたりもなきことなり」(同上)といわれるごとく、いつでも念々が珍らしく、刻々があたらしいのである。信心は常識的に過去から現在へ、また未來えとうつるのではなくて、つねに現在が軸となつて、過去が、また未來がここに極促せられて、つねにそれは現在から現在へという形式をとる。かくのごとく現在から現在へとはたらいで、つねに珍らしく新らしいということこそ信心の本質的性格であつて、それはまた三心釋の二種深信においても適確にときあらわされているところである。「決定深信」自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已來常沒常流轉、無有出離之緣。」とは即ち機の深信の内容であるが、ここで罪ふかき生死流轉の自身とは、昨日のこともなく、明日の自己でもない。『法事讚』にもいふごとく「今日今時」であつて、正しく現在が罪惡深重であり、虛假雜毒である。しかもそれは同時に「曠劫已來常沒常流轉」という過去を背負いつつ「無有出離之緣」の未來をはらむ、いわば絶對現在である。それゆゑに「自身現是罪惡生死凡夫」という現在において、遠々の過去から流轉し來つた自己自身が信知せられ、同時に未來永劫「無有出離之緣」の自身が

明らかとなる。信心における自己は、いつどこにおいても現在が雜毒虛假であるというよりほかはない。法の深信についてもまったく同様であつて、『禮讚』には特に「今信<sub>釋</sub>知彌陀本弘誓願、及<sub>下</sub>稱<sub>釋</sub>名號<sub>釋</sub>下至<sub>釋</sub>十聲一聲等、定得<sub>釋</sub>往生、乃至<sub>釋</sub>一念、無<sub>釋</sub>有<sub>釋</sub>疑心」といふごとく、「今」「乘<sub>釋</sub>彼願力<sub>釋</sub>」「散善義<sub>釋</sub>」ずるのであり、「今日今時聞<sub>釋</sub>要法<sub>釋</sub>」(『法事讚』下)くのである。かくしてわれわれは今現に墮ちるものであり、したがつて今現にすくわれなければならぬといわれるとき、曠劫の過去から未來際をつくしてすべてが、この一念に極まるのである。信の一念が「信樂開發時剎之極促」といわれ、同時にまた「廣大難思之慶心」とたたえられる所以である。まことに信心のはたらく場所は、昨日でもなく、明日でもない。それは今日今時、不實な自己の主體となつて現在にはたらいでずにはおかないのである。しかしかくのごとく信心がわれわれの現在にはたらいでる具體相こそ、善導が「口常……身常……意常……」等とか「一心專讀<sub>釋</sub>誦此觀經……」、一心專禮<sub>釋</sub>彼佛……、一心專稱<sub>釋</sub>彼佛……」等と、念佛を軸としてひろく身口意の三業の上に擴大してうけとつた正行の意味であるといつていいであらう。

しかしながら、それはひろく三業の上に發動するとはいつても、もはやみずからの機功をほこる回向の自善でもなく、もとより、自身往生のために擬する行爲でもない。正しくそれは二種深信の等流する行業として、われわれ自身が行じつつ、しかもわれよくなしえたりと自身にはこる思いをはなれた行爲である。如來からたまわつた信心は、まさしくわれわれの現在にはたらきいでて、あきらかに自己の不實を信知せしめ、同時にこのものためにする佛願の大悲を知らしめて、ただ自身においては慚愧と報恩のおもいがあるだけだからである。

定散の諸善はもとより、助業をも廢してただ一つ念々不捨者の稱名をもつて正定之業とし、十聲一聲聞名のもので定んで往生をうるといつた善導も、その一生は厳しい持戒の聖僧として、平生稱名の功を重ね、數萬巻にも及ぶ『阿彌陀經』の書寫・讀誦から、さらに、寺塔の修覆、淨土變相の描畫にもはげんだと傳えられ、またもつばら彌陀一佛を禮拜し、讚嘆供養することをすすめつとも、他面、龍門の盧舍那佛像造成の壯舉にしたがい、或は天曹・地府から一切の冥道にいたるまで、すべてを禮敬することをわすれなかつたのである。その生涯を彩るこれらの行蹟は、いずれも師自身の規定した正定之業

でないことは明らかである。けれどもわれわれはこれらの一々をおさえて、それゆえに善導の信仰教義がなお未達の域にとどまつたといえるであらうか。また、行儀を中心とする、四部五卷の『具疏』の著作があるからといって、だから善導自身未だ要門の世界をいでなかつたと評しることが出来るであらうか。さらに助業が五種正行中の一分とせられてはいても、それが雜行と同じく三業起行の場においてかたられたり、九品正行の説があるゆえをもつて善導の實踐論が不純であつたといえるであらうか。今日今時、機の虚假を信知し、明らかに法の眞實を信ずる他力信心に徹した善導においては、これらの三業起行の一つ一つがあきらかに眞實信心に相應する行業として、正定業の稱名と何等の矛盾もなく行ぜられたものに相違ない。それこそ正しく三心の信心が、善導自身において現在にはたらきうごくすがたそのものであつたと考えられるからである。

かくして善導における正行とは、單にそれが往生經に規定せられた行であるからとか、また後世の一部の人々がいうごとき信心に淨化せられた行であるから、それゆえに正行とよばれるというよりは、本質的には本願眞實をきいてただ念佛一つがまことと知らしめられるそのと



き、よろずのことみなもてそらごとたわごとと信知せられるがゆえにこそ、正行となずけられるものであつた。即ちそれは、正しく自己自身の現在にはたらくまことの信心に支えられて、ありのままに煩惱具足のわが身を信知し、それゆえに定散自心のはからいをはなれた行業であるからこそ正行といわれるものであつたに相違ない。

このことは、上述した『禮讚』前序の安心・起行・作業論をうけて専修二修の得失を批判するなかにおいて、その批判根據が特に本願相應の信心一つにもとめられていた一事をかえりみても、これをうなずくことが出来るであらう。そこでは専修・雑修の分岐點は、要するに正念に住して本願に相應するか否かに存するのであつて、本願に順ずる眞實の信心においてみずからをたのむ自力疑心さえ離れえたならば、すべてが専修正行の名にそむかないものと判定せられてゐるのである。したがつて逆にもしも本願と相應せず、慚愧懺悔の心がなく、みずから思い上つて佛恩を念報せず、名利と相應するなど、眞實信心の行業でなく、佛力より發起せざる行爲であるかぎり、五種正行はもとより念佛そのものさえも雑修雜行に轉落するほかはないのである。「余比日自見<sub>ニ</sub>聞諸方道俗、解行不同<sub>ニ</sub>專雜有<sub>レ</sub>異。但使<sub>ニ</sub>專<sub>レ</sub>意作<sub>レ</sub>者十即十生。修

雜不<sub>ニ</sub>至心<sub>ニ</sub>者千中無<sub>レ</sub>一。」(『禮讚』)ときびしく批判し、さらに「仰願一切往生人等、善自思量已能。」(同上)といましめる所以である。それゆえに宗祖はこれをうけて精微な正雜助正論を展開し、さらに『高僧和讚』にはまさしく「善導禪師」の章において、所謂助正兼行や專名祈現の雜修をもえぐり出し、「助正ならべて修する」ものについて「一心をえざるひとなれば、佛恩報ずることなし」と詠じて、雑修そのもののよつて來る本源を明確に指摘していられるのである。われわれはここに宗祖における美しい善導相承のあとをみるとともに、また雑修雜行の本質が何物であるかを明らかにすることが出来るのである。

#### 四

上來しばしばいうごとく、善導において稱名念佛の一行が眞實の行とせられる根據は、それが彼の佛の願に順ずる行であるからであり、法然のいうごとく正しく如來が選擇攝取せられた行であるからである。しかるに念佛が特に選擇せられたということは、われわれの行ずる三業の行爲がどこまでも雜毒虛假の行であるからである。それゆえにわれわれが念佛を信ずるといふことは、その

まま衆生の三業起行が虚假雜毒であるといふことの信知に裏付けられていることを意味するものといえる。したがつて信心の現在するところ常にわれわれの行は批判せられて雜毒虚假となり、信心さえたしかであるならば、われわれは思い上つてこのような衆生雜毒の行を廻向するとか、或は疑心自力の念佛を如來に對して捧げるとかいうごときあやまちを犯すことはないであろう。何となれば、そこには衆生三業の行をきびしく批判して、あからさまに雜毒を雜毒と知らしめる信心がはたらしているからである。宗祖において信心が特に信心の智慧といわれる所以がここにある。

されば信心はつねにわれわれの現在にはたらい行の批判者となり、ありのままに自己の不實を知らしめるとともに、このもののためにする大悲に對して慚愧と報恩の根源とならずにはおかないであろう。かくして信心の智慧にいれば、われわれは依然として煩惱具足の身にかわりはないけれども、自己は、もはや單なる自己ではなく、「そくばくの業をもちける身」が悲しまれると同時に、「たすけんとおほしめしたちける本願」がたじけなくよろこばれる身となつたのであり、「信心の智慧にいらてこそ佛恩報ずる身」となつたのである。ここでは

「よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることな」しとの深信が、われわれにおいて決定的であればあるほど、それはわれわれをして單なる自己否定におわらしめないであろう。なぜならば自分自身の不實を自覺することそのことが、既に眞實の信心がわれわれの現在にはたつき出たすがたそのものにほかならないからである。したがつて、もしもわれわれが「よろずのことみなもてそらごとたわごと」のゆえに、ここに停滯するならば、われわれには信心が現在にはたらいといはれないであろう。不實なものは人ではなくて自分自身であり、したがつて救われるものもまた人ではなくて、自分自身であると信知せられるとき、われわれは限りなき懺謝と深い自責とをわが身のうえに荷わずにはいられないからである。「親鸞一人がためなりけり」とはまさしくこのことを自覺した宗祖自身の感激である。

かくして信心はつねに自己の中軸となつて、昨日でもなく明日でもなく「今日今時」自己は墮ちるものでありつつ従つて救われるものであるとの確信をうちにつつんで、われわれをして、佛恩報ずる身と轉せしめるのである。まことに信心がわれわれの現在にはたらく具體相こそ「應報大悲弘誓恩」といわれる報佛恩の世界である。

かつては過去の業におびえ、未來の闇に惶いた自己であったが、ここでは現在の信に立つて未來成佛の確信に一つまれつつ、曠劫以來流轉しきたつた過去に對しても、かえつてそこに不斷の慈育がただかれ、世々生々の佛恩が仰がれるのである。善導がしばしば曠劫以來空しく流轉しきたつた自身をかえりみて現在の遇法をよるこび、他力の信心の何たるかをあらわさんとして、改めて遠劫以來流轉しきたつた自己をみつめ、これに乗じて攝受衆生の大悲を開くのもまつたくこのゆえであるし、また、『觀經』定散教の教主釋尊の恩徳を仰ぎ、諸佛遇法の因縁に感激してひたすらその鴻恩を深謝しているのもここにその理由が存するのである。

されば信心は單に念佛のほかのすべてを價值なきものとして捨て去るだけのものではなくて、あらゆるものを生かしてゆく原理であり、すべてのものに對して佛恩を仰ぐ基底でもあるということが出来る。信心のはたらくところ、そこでは「念佛のみぞまこと」と廢ばれることはもとよりのことながら、一度びここに腹がすわるならば、あらゆる諸善萬徳の上にもまた改めてそれぞれの意味が発見せられ、その價值が見出されてゆく地盤がひらかれるのである。宗祖が十九願の要門に對しても、「假

令之誓願良有<sub>レ</sub>由哉。假門之教欣慕之釋是彌明也。」といひ、また、二十願の眞門に向つても同じく「果遂之誓願良有<sub>レ</sub>由哉。」とほめ、つづいて「爰久入<sub>ニ</sub>願海<sub>ニ</sub>深知<sub>ニ</sub>佛恩<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>報謝至徳……」と、それぞれの世界に深厚な佛恩を仰ぎ、さらに「遇獲<sub>ニ</sub>行信<sub>ニ</sub>遠慶<sub>ニ</sub>宿緣<sub>一</sub>と、すべてを今日の獲信へのはるかなる宿緣として攝取し、感戴せられたのも正しくこのゆえであろう。ここでは信心は明らかに念佛のほかの諸善を否定したり退けたりするものではなくて、却つてこれを攝取し抱容して、そこに無限の佛恩を仰ぎゆく契機とせられている、とみられるのである。それゆえに「幾度も廢立をもつて先と」して念佛爲本に徹底し、「ふたつならぶことをきら」つてただ阿彌陀一佛にのみ歸命する眞宗も、よろずの佛・菩薩のおろそかにしないのであるし、「たゞ念佛のみぞまこと」といいつつ、いよいよ身口意の三業がつつまれ、さらには疑謗さえも却つて獲信の縁と轉ぜられ、またこの法をそしめるものに對してさえも「あわれみのこゝろ」がもたれるのである。さればといつてだからわれわれの信心が不純になつたとか、廢立爲光の標幟が破れたとかいうものではない。かえつてここにこそすべてを生かし、すべてに佛恩を荷う信心の現在にはたらくすがたがある。い

わゆる慈光を蒙るものは柔軟心をうるといわれる風光であるということが出来る。これに反して信心が固定し停滞して現在にはたつきでる力が失われるならば、このとき佛心は見失われてわれひとりよしとおごる排他的獨善におちいるに相違ない。そうして信心は圖式化されて現實の壁を突破する力を失うのみならず、他面、正雜・助正の混亂をすら招くにいたるのである。

上來しばしば言及した善導の三心釋結文にいう「三心既具無行不成」とは、かくの如き現在にはたらく眞實の信心の本質的性格をもつとも動的にいいあらわした言葉であるといふべく、われわれはその具體相を上述のごとき善導のひろやかな實踐論の上にもとみに、こゝにこそ信心と行業との關りあうすがたをあきらかに領解することが出来るのである。

大谷學報 前號目次

一遍上人と融通念佛……………五 來 重

宋代功德使制度管窺……………滋野井 恬

新羅元曉の傳記について……………本 井 信 雄

教育と宗教

—シュプランガーの教育論の根柢にあるもの—

……………前 田 博